

---

# 宝神伝説殺人事件

奈森さくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宝神伝説殺人事件

### 【Nコード】

N4331P

### 【作者名】

奈森さくら

### 【あらすじ】

財宝が眠るとされる「宝眠島」に宝探しに訪れたコナン達一行はそこで宝を守る「宝神」の伝説を聞く。そして宝神伝説そっくりに殺される人々。宝神の天罰なのか、コナン達が事件解明に挑む。

## プロローグ(前書き)

コナン君と哀ちゃんの相棒シリーズ第五弾です。感想お待ちします

## プロローグ

「ねえ、コナン君も行こ？」

机の上に広げられた新聞紙は机上の面積を優に越える大きさで、端の方は下に垂れ下がる何ともだらしない姿を見せている。授業が終わりさて帰ろうかとしていた矢先の事だったので、机に置いてあった鞆が見事に新聞紙によってその姿を見えざるものにされてしまった。

机の前に立つのは同じクラスの友人「吉田歩美」である。中学入学と同時にそれまでトレードマークだったカチューシャを辞めた彼女は、かつて見た十年後の顔写真と瓜二つであった。今や帝丹高校ナインバー2の美少女とさえ呼ばれているらしい。そんな歩美が、突然コナンの机の上一杯に広げた新聞紙の一点を指し冒頭の台詞を口走ったのである。

「宝眠島の財宝伝説」

そこまで大きくはない記事だが、そこには間違いなくそう書かれている。記事の内容はとある考古学者が、その世界では有名な宝眠島に眠るとされる財宝について自身の解説を述べているものである。記事横には宝眠島の地図も掲載されているが、この記事が一体何なのか、コナンは歩美に聞いた。

「だから、探しに行こうって事だよー！」

コナンの理解の遅さに腹を立てた歩美が、口調をやや強くして言った。

「…探しに行くって、宝眠島のお宝を、か？」

「そつ。明日から連休だし、丁度いいと思って」

こういうところは十年前と全く変わっていないとコナンは思う。宝と聞くとまるで子供の様に目を輝かせ、頭の中に描くのは自分がお宝を見つける姿。そういう事があって余計に心躍るものがあるのかもしれない。

「なあ歩美ちゃん、俺の他に誰かいるのか？」

「うん、元太君と哀ちゃんも誘ったよ。光彦君にも声かけたんだけど、勉強が忙しいみたいだから今回は遠慮しとくつてさ。だから、私とコナン君と哀ちゃんと元太君の四人って事になるね」

まあ何時ものメンバーだが、コナンは少々驚いていた。哀の事だ。彼女なら、なにか適当に用事を作って断る様子が容易に想像出来るだけに、今回参加の意を示している事はコナンにとっても意外な事であったのだ。

\*\*\*

「なあ、お前も来るんだろ？宝探し」

阿笠邸で夕飯の支度をしている時コナンは哀に聞いた。

「ええ、行くわよ。あなたも来るんでしょ？」

「……まあ、一応。けど珍しいな、お前が宝探しだの何だのに参加するなんて」

「……別に。たまにはいいかと思っただけよ」

少し哀の様子に違和感を感じたコナンだったが、トイレから出て来た博士によってそれはすぐに頭の中から消え失せていた。

(……………)

哀はコナンをじっと見つめていた。

## 1・探索初日

東京湾から船で一時間。太平洋に浮かぶ宝眠島にコナン達一行が着いたのは午前十時であった。天候も良く、間もなく十二月だということに少し暖かく感じられる。歩美の提案で始まった今回の宝探しだが、いかんせん情報量が少なすぎて探すにもどこを探せばいいのかわからないという事もあり、一先ずコナン達は宿泊する旅館へと足を向けた。

島にあるたった一つの旅館「宝眠館」は二階建ての立派な作りで、田舎町の古びた旅館を想像していたコナン達は少し驚いていた。

「いらっしやいませ、お待ちしておりました」

コナン達を出迎えたのは女将の守口フミで、年齢は五十少し前といったところだろうか。今回コナン達が予約したのは二部屋。つまり男チームと女チームにわかれるという事だ。

「失礼いたします」

コナンと元太の部屋には女チームの案内に廻った女将の代わりに仲居の女性が入って来た。二十代半ばといったところだろうか、どことなく女将に似ている様な雰囲気がある。

「もしかして、仲居さん、女将さんの」

「はい、娘です」

ニツコリ微笑む彼女にドキリとした様子の元太。彼女の名前は守口

七、正真正銘女将であるフミの娘であった。

「親子でやってらっしゃるんですか」

「はい。一応、子供は私一人だけなので。手伝わないわけにも、い  
かなくて」

この時一瞬、彼女に陰りが見えたのをコナンは見逃さなかった。

\*\*\*

「島の地図、もらったぞ」

男部屋に集まったコナン達。元太が先程守口七から貰った宝眠島の  
地図をテーブルの上に広げた。

宝眠島は大きく分けて2ブロックに分かれている。まず島の南ブ  
ックは港寄りで、住民の殆どがこの南ブロックに住まっている。当  
然の事ながら「宝眠館」も南ブロックであった。

島の北ブロックには住居などはなく神社や、更には墓地などがある  
だけだという。島の人間でさえあまり足を踏み入れる事はないら  
しい。

「つまりだ、もしお宝を隠すなら人が近寄らない島の北側の可能性  
が高い。だから今日は、北側を重点的に宝を探そうと思う」

「……だけど、島の北側って言ったって、とてつもない敷地面積な

んでしょ？もう少し手掛かりがあった方がいいと思うけど」

哀が言う。

「そういえば、北ブロックには神社があるんだよね。なんか怪しくない？」

「確かに、怪しいな。よし、その神社に行ってみようぜ」

元太と歩美は既にやる気満々。コナンと哀は二人の後をついていく様な感じであった。

\*\*\*

島にある神社「宝眠神社」に着いたコナン達だったが、その雰囲気  
に思わず足を踏み入れるのを躊躇ってしまった。神社の社は今にも  
崩れてきそうな程老朽化していて、辺りは木々に囲まれている為昼  
間なのに薄暗い。誰も近付きたがらないのも頷けた。

「……なんか、不気味だね」

歩美が哀にしがみつく。

「と、とりあえず、探してみようぜ」

元太も少々腰が引けている。

「おい元太、ちょっと待てよ。もう一回旅館に戻って、もっとちゃんと財宝伝説の話聞いた方がいいぜ？闇雲に探して見つかるなら、とっくに誰かが見つけてるよ」

「確かに、江戸川君の言うとおりね。もう一回、今度は詳しく話を教えてもらいましょう」

結局その日の探索はこれで打ち切り。コナン達は計画を立て直す事にしたのである。

## 2・宝神伝説と哀への不信感

宝眠館での夕食は午後七時からである。時間になると仲居が宿泊者のもとに料理を運んで来るのだが、コナンと元太の部屋に来たのはあの守口七であった。彼女はこの島の生まれで、高校一年から二十歳までは東京に居たらしい。その後、実家の旅館業を手伝う為に再び島に戻って来たのだという。今年二十五になる彼女は財宝伝説の話を知りたいと言うコナン達に、夕食の後でならと快くOKしてくれた。

「じゃあ、あなた達も財宝探しの為にこの島に？」

男チームの部屋に集まったコナン達一行と仲居の守口七。コナン達が島に来た目的が財宝探しだと知ると七は少し驚いた様子を見せた。

「あなた達もって、僕達の他にもいるんですか？財宝探しに来てる人が」

「ええ。今日この旅館に泊まってる人達の中にも、何人かいらっしやるわ。トレジャーハンターの三人組の人と、大学生さん、あとカメラマンの人。皆、財宝探しが目的みたいね」

「……そんなに有名なの？この島の財宝伝説って」

哀が呟く様に言った。

「その業界じゃ結構有名みたいね。私も子供の頃に、よく聞かされたわ。宝神様の話を」

「宝神様？」

「島の宝を守っている神様よ。邪な心を持つ人が宝を奪おうとする  
と、宝神様の祟りが降りかかるっていう、島に伝わる伝説みたいな  
ものね」

元太と歩美がゴクリと唾を飲んだ。

「でも、宝神様の伝説は島の人なら皆知ってるの。宝神伝説の唄が  
あるくらいなもの」

「宝神伝説の、唄？」

「ええ。私のお母さんとかは、子供の時その唄で宝神伝説を聞かされ  
たみたい」

「それ、どんな唄なんですか？」

七はそう言われると小さく咳き込み、ゆっくりとした口調でそれを  
口ずさみ始めた。

「島の宝に近づきし、邪な心を持つ者が一人二人三人と、宝神様の  
怒りにふれる。――一番最初に近づきし、邪な心を持つ者が宝神  
様の怒りにふれて、首を曲げられ殺された。――二番目に近づき  
し、邪な心を持つ者が宝神様の怒りにふれて、水辺で溺れて殺され  
た。――最後に近づきし、邪な心を持つ者が宝神様の怒りにふれ  
て、炎に焼かれて殺された。――島の宝に近づきし、邪な心を持  
つ者が宝神様の怒りにふれた」

七が唄い終わった後、コナン達はしばらく誰も言葉を発しようとはしなかった。

「今のが、宝神伝説よ。島の人はこの唄を知ってるから、誰も宝探しをしようとはしないの。あくまでも、伝説なんだけどね」

確かにそんなものを聞かされた日には宝探しなんてしようという気にはならないだろう。現に今、歩美と元太の顔色は明らかに悪くなっている。

「他に、何か財宝伝説に関する話はないのかしら？宝の在処を記した地図があるとか……」

「残念だけど、ないわね。それに、この島に宝があるっていうのもあくまで伝説の話だし、事実かどうかはわからないわ」

コナン達は七に礼を言い、七は部屋を出て行った。去り際に「ではおやすみなさいませ」と守口七から、旅館の仲居に早変わりしたところはコナンも感心するところがあった。

「で、どうするの？今回の宝探し、中止にする？」

哀が試す様な言い方をする。しかしコナンはこの哀の言い方に多少の疑問を感じた。こんな言い方をして元太が素直に引き下がる訳はないのを、哀もよく知っているはずだ。余計に元太の気持ちを頑ななものにしてしまう事には間違いないのに、何故そんな言い方をするのだろう。

「此処まで来て、そんな簡単に帰れるかよ。何か収穫しねえと、気

がすまねえ」

やはりこうなる。

「おい、灰原、お前何であんな事言っただよ。あんな言い方すればこうなるのは目に見えてただろうが」

「……………」

「お前まさか、本気で宝を探そうとしてんのか？」

コナンが聞くが哀はすっと立ち上がり

「……………吉田さん、部屋戻りましょう」

部屋へ帰ってしまった。

「……………何だ、あいつ」

哀の様子に不信感を抱き始めるコナンであった。

### 3・行方不明の客

宝眠島唯一の宿泊施設である宝眠館には現在コナン達を含めて九人の宿泊者がいる。宝眠館は立派な作りではあるが、建物自体はさほど大きくない為宿泊できる部屋は全部で六部屋しかない。コナン達が二部屋使用し、三人組の男女が二部屋、大学生とカメラマンが一部屋ずつ使っている。今宝眠館は満部屋という状態になる。宝眠館が満部屋になるなど開業以来初めての事で、これも先頃の新聞に宝眠島の財宝伝説の記事が掲載されたおかげだろうと、女将のフミは嬉しそうに話していた。フミの言葉を裏付ける様に宝眠館に宿泊する九名は皆、財宝探しに訪れた者達で、コナン達が島に来た翌日の朝食の際初めて九名全員が顔を合わせる事になっていた。

「……………ねえ」

朝食を食べるコナン達は横一線に座っており、一番左に座るコナンの隣には哀が着席している。夕べから哀の様子に若干不信感を抱き始めているコナンだが、それをおくびにも出さない様子で哀に接していた。哀も哀で夕べの事など、まるでなかったかの様にコナンに話しかけている。

「おかしくない？」

「……………何がだ？」

「……………宿泊者の数が足りないのよ」

えっ？とコナンは目線を他の客達に配らせた。昨日、仲居の守口七

が言っていた客の情報と照らし合わせてみる。まず一番最初に目に入ったのは、コナン達を除いて恐らく最も若いだろう男。一人で食事を食べている所を見ると、多分彼は大学生かカメラマンであろう。そしてその隣、少し離れたところに中年の男が居る。この男も一人だが、男の隣にある荷物類の中にカメラがあるのを見つけ、この中年男がカメラマンであるとコナンは判断した。つまり若い男性の方は、大学生という事になる。そしてその隣、二人の男女が座っているが、先程の二人と違い比較的近い距離で何やら話をしている様子から明らかに顔見知りだと思われ、この二人がトレジャーハンターのグループだと考えられた。

「……本当だ、一人足りねえな」

守口七によると、確かトレジャーハンターグループは三人組の筈だ。確かに一人客が居なかった。しかし、まだ部屋で寝ているという事もある。さして気にする事でもないと思ったコナンだが、二人の会話が聞こえたらしい守口七の言葉でその考えは吹き飛んだ。

「……朝から、行方不明なのよ。あの人達の仲間」

いきなり後ろから言われたのでコナンも哀も驚いたが、すぐに真顔に戻って詳しい話を聞いた。隣にいる歩美も、様子に気づいたらしく話を聞く姿勢になっていた。

「それが、大東さんっていうんだけど、朝起きたらもう居なかったらしいの」

「……朝食も食べずに？」

「ええ。同じグループのあの人達は、多分抜け駆けして財宝探しに

出掛けたんだろうつて言ってるわ。なんでも、昨日怪しい場所を見つけたから、そこに行ってるだろうつて」

「……………怪しい場所？」

「鍾乳洞の事だろうつな……………」

声が出た方を向くと中年男、つまりカメラマンの男が荷物を背負い立っていた。

「鍾乳洞？」

「ああ、俺も昨日見つけたばかりでまだ詳しくは調べてねえが、島の北側には鍾乳洞があった。あそこなら、お宝の隠し場所としてはうってつけた。トレジャーハンターなら、調べずにはいられねえだろうつ」

「……………知らなかった。私達、神社に行っただけで帰って来ちゃったもんね」

歩美の言葉でカメラマンの男は、コナン達も自分と同じ目的であるらしい事に気がついた。

「……………ほう。お前等も宝探しに来たのか。まあ、そうだよな。それ以外にこんなオンボロ島に来る理由なんて無えよな。俺は撰津六郎、カメラマンだ。仲良くやろうつや、少年少女達」

撰津六郎は手を出し握手を求めた。しかしコナンはそれを無視し、鋭い目を彼に向けた。

「……………悪いけど、俺達は島の人がいる前で平気でその島の悪口を言うような人と、仲良くするつもりはないですよ」

元太と歩美が強く頷く。

「ハハハッ！いいねえ少年少女達、怖い怖い。これ以上ここに居たら、この子達に怒られちまうから、そろそろ行くとするか」

大きな笑い声をあげながら立ち去った摂津。彼が立ち去った後、七はコナン達に礼を言った。

「それより皆、俺達もその鍾乳洞に行ってみようぜ？お宝はそこにあるかもしれないんだろ？」

「そうだね。行ってみよう」

既に宝眠館にはコナン達一行だけが残っている。仲間を一人欠いたハンターグループも、先程意気揚々と出かけて行った。

「あなた達、鍾乳洞は危険は場所だから、気をつけてね」

「はい」

そう言う七に見送られコナン達は鍾乳洞へ向かって歩みを進めた。

#### 4・首を曲げられ

昨日コナン達が訪れた神社より更に奥深く進んだところにその鍾乳洞はあった。辺りは木々に囲まれ、時折鳥の鳴く声がいやに不気味に聞こえてくる。鍾乳洞の入り口には島の人間が随分前に作ったであろう立ち入り禁止を示す木製の看板が立っており、その看板に結わえ付けられた一本のロープが張られていた。

コナン達には鍾乳洞というものにはいい思い出がない。もう十年前になるが、かつての少年探偵団四人が興味本位で立ち入った鍾乳洞で死体遺棄の現場を目撃してしまうという事があった。コナンに至ってはそのせいで生死の境をさまよい、哀にも随分と迷惑をかけてしまっている。

「…………… 案外、またこの中の誰かが見たりしてね。額に穴が開いた、無惨な人間を」

元太と歩美はゴクリと唾を飲む。

「……………とにかく入ってみよう」

コナンが先導する形で四人は鍾乳洞へと足を踏み入れた。

\*\*\*

懐中電灯で前を照らしながら比較的ゆっくりと歩みを進めていく。

足場も少々悪く、歩美が一度蹴躓きそうになった。そして十分程中を進んだ頃、四人は二手に分かれた道の前に辿り着いた。

「……………どうする？」

不安げに歩美が聞く。

「……………私達も二手に分かれた方がいいんじゃない？」

「……………けど、もし何かあった時に連絡はどうすんだよ。携帯は圏外だぜ？」

「それなら大丈夫よ」

そう言いポケットから哀は何かを取り出した。哀の掌に乗るそれはかつて自分達が愛用していた「探偵団バッチ」であった。

「探偵団バッチ……………。お前、なんでこんなもの」

「たまたまよ。たまたま家を出る時に目にとまったの。それで、なんか、持っていった方がいい感じがして」

哀はその一つをコナンに渡す。

「じゃあ、男チームと女チームに分かれるか」

「ええ。何かあったら、バッチで連絡すること」

そして四人は別々の道へ入っていった。

\*\*\*

男チーム、コナンと元太の二人はコナンが前を歩いている。

「なあ、元太」

「なんだ？」

「灰原の奴さ、何か変じゃねえか？」

今のコナンはお宝のありかより哀の様子が何時もと違う事の方が気になるらしい。それもそのはず。お宝探しなどというものに参加したり、宝神伝説の話聞いて宝探しへの意欲を無くしていた元太に発破をかけ宝探しを続行させたり、どうも今回の哀の行動はコナンが納得いくものではないのだ。哀が一体何を考えているのか、コナンにはわからなかった。

「まあ、そう言われりゃ、ちょっと何時もと違うな」

「……………だろ？あいつ、何か隠してんのかな」

いくら考えても答えは出ないままである。

一方、女チーム。哀と歩美は、互いの手をしっかりと握り締めていた。いや、歩美が一方的に哀の手を握ったという方が正しいのだが。

「……ねえ哀ちゃん」

「なに？」

「ちょっと、聞いていいかな」

「ええ」

「……何で昨日、元太君にあんな事言ったの？」

思わず歩みを止めてしまった哀。歩美も同じように立ち止まる。

「……どういう事？」

「だって、どう考えても哀ちゃんらしくないんだもん。あんな言い方すれば、元太君がムキになるって知ってるはずなのに……」

哀は俯いてしまう。

「……ねえ哀ちゃん、何か隠してない？私達に」

しばらくの沈黙が二人の間に流れていた。その沈黙を破ったのは歩美である。

「まあ、哀ちゃんが言いたくなったら話してよ。ほら、行こ」

そう言っただけで先に歩き出す歩美。哀はしばらくその場から動こうとしなかった。歩美が少し先に行っただけで慌てて後を追おうとしたその時、鍾乳洞内に歩美の悲鳴が木霊する。哀がすぐに駆けつけた。

「吉田さん!？」

そして、駆けつけた哀も歩美の持つ懐中電灯に照らされたそれを見て思わず小さな悲鳴をあげてしまった。今までよく殺人事件現場に居合わせ、人間の遺体を見てきたが、これほどまでに目をそむけたくなる遺体は初めてであった。

「歩美!?!灰原!?!」

少しして歩美の悲鳴を聞いたコナンと元太が駆けつけて来た。

「……………なっ」

コナンもあまりに悲惨なそれに言葉が出ない様子だ。元太も、顔面蒼白になっている。

「……………首が」

座りこんではいるが体は確かに前を向いている。背負っているリュックが、鍾乳洞の壁との間に挟まれていた事からもそれは間違いない。しかし、それに反して頭だけが奇抜な方を向いていた。おそらく首の骨が折れているのだろう。

「……………あれ、この人」

リュックに名前が書いてあった。「大東一也」その名前は確かに今朝聞いたばかりの名であった。



## 5・見立て殺人

交野平八は宝眠島の駐在署に三十年近く勤務する巡査である。島民一人一人の顔と名前を鮮明に記憶しており、島の人間からは「平さん」の愛称で親しまれていた。

平さんこと交野平八が宝眠島唯一の駐在になってから島で起きた最も大きな事件といえば、島長の娘が家出をして行方不明になった事である。結局その娘は近所の住民が保護しており事なきを得たのだが、それつきり島で事件と呼べるような事は起きていなかった。ましてや人間の死体などテレビドラマで俳優が演技しているところではしか見た事が無い。だからこそ、交野巡査は元太から鍾乳洞内で人が死んでいるという報せを受けた時、冗談半分にしか捉えていなかった。

\*\*\*

鍾乳洞内にはコナンが一人残っていた。哀は歩美に付き添い外に出ている。コナンが遺体を調べたところ、被害者大東一也の頭部からはかなりの出血が見られ直接の死因は頭部を殴打された事による頭蓋骨骨折、もしくは脳挫傷と考えられた。つまり犯人は大東を殺害のち、首の骨を折ったという事になる。更に死後硬直の進み具合から見て、大東一也が殺されたのは今朝六時から七時の間と推定された。

「コナン、駐在さん連れて来たぞ」

しばらくして駐在を伴った元太が戻って来た。駐在の巡査は五十年代後半といった老齢で、顔つきから穏やかな気性である事が伺えた。

「……………な、なんという事じゃ」

駐在は初めて人間の殺された遺体というものを見たらしく口をパクパクと開け、ただただ驚愕していたが、その内我に返り慌てて駐在署に戻って本土の警察に一報を入れている。コナンもその時、駐在に促される様な形で鍾乳洞の外へと出た。

「……………とりあえず昼過ぎには来るそうじゃ。それまで現場はそのままにしておくようにと言われたが、君達、何か触ったりしてないじやろうな」

「……………触りたくねえよ。あんなの」

元太の言葉に交野巡査は「まあ、確かにな」と納得していた。

「君達、宝眠館に泊まっておるのじゃろ？今から儂もそこに行くから、一緒に来るといい」

「あれ、駐在さん。歩美達がなんで島の人間じゃないってわかったんですか？」

「当たり前じゃ。儂は島民の顔は全員覚えとる。余所者かどうかわらい見分けられるよ。あの殺されとった男も、余所者じゃろう？となれば、宝眠館に泊まっておるはずじゃから、ちよっと話を聞きにいかんとな」

「…………身元ならわかってるわよ」

哀が言う。

「名前は大東一也さん。トレジャーハンターで、他にも同じグループの人が二人、宝眠館に宿泊してます。実は大東さん、今朝から行方不明で、気になってたんですけど」

「…………そうじゃったのか。しかし、あの男も君達も、何で鍾乳洞なんかに行っておったんじゃ？あそこは、立ち入り禁止の看板が立っておったじゃろう」

「私達、宝眠島の財宝探しに来たんです。それで、あの鍾乳洞が怪しいってなつて。大東さんも、多分歩美達と同じ理由で」

それを聞いた交野巡査は、はあっと溜め息をついた。

「…………全く、君ら高校生だろう。小学生じゃあるまいし、財宝だの何だのを信用する歳でもないじゃろうに。まあ確かに、この島にはお宝が眠っているという言い伝えがあるが、あくまでも伝説上の話じゃ。本当にそんなものが、あるわけなからう？」

「…………でも、旅館の仲居さんから聞きましたけど、この島には宝神伝説っていうのがあるんですよね？お宝の話が嘘なら、何でそんな伝説が」

「あれは昔、島の人が子供達に、宝探しで危険な場所に行ったりしないようにする為に作られたものじゃよ。お宝に近づけば、宝神様に殺される。そんな事を聞かされたら子供達は宝探しなんぞせんから」

元太と歩美は落ち込んだ様に下を向いてしまった。その時、少し離れて後ろを歩いていたコナンが同じく後ろを歩いていた哀に話しかけた。

「……………もしかしたら、犯人はまだ殺人を続けるつもりかもな」

「えっ？」

「……………大東さん、頭を何か固い物で殴られ殺された後に首の骨を折られてるんだ。何で犯人は、わざわざそんな事をしたのか、それが気になってたんだけど、今ちよっと思っただ事がある」

「……………もしかして、宝神伝説」

「ああ。宝神伝説の唄の一番、最初に宝に近づきし者が、首を曲げられ殺された……………。この歌詞に状況が似てるんだ」

「じゃあ犯人は、宝神伝説に見立てて殺人を？」

「それはまだわからねえ。だけど、もしそうだとしたら、犯人は間違いない、まだ殺人を続けるつもりだ。少なくともあと二人は、死者が出る」

二人は立ち止まった。宝眠館の玄関口で掃除をしていた守口七と、ふと目が合った。



## 6・本庁の刑事

交野巡査の報せを受けた東京の警視庁から、高木渉をはじめとする面々が島に到着したのは午後一時を少し過ぎた頃であった。交野は高木達をまず鍾乳洞へと案内し、ある程度現場検証が済むと今度は宝眠館へと案内役を務めた。

宝眠館には亡くなった大東と同じハンターチームだった高石勇三と四谷和泉、更にはカメラマンの摂津、大学生の松原誠二と宿泊客全員が集められていた。宿泊客達は仲居の守口から、今朝ほどこから行方不明になっていた大東が遺体で発見された事を聞かされると、驚きを隠せない様子で四谷和泉はその場で泣き出してしまった。どうやら大東と四谷は恋人同士であつたらしい。そして、しばらくすると交野巡査と共に来た高木刑事から更に詳しい状況が語られた。

「大東さんの死因は、恐らく頭部を殴打された事による頭蓋骨骨折、もしくは脳挫傷です。まだ解剖に廻していませんのではっきりとは断定出来ませんが、ほぼ間違いないかと。それから大東さんの死亡推定時刻ですが、今朝の六時から七時の間と思われます。え、と。遺体の第一発見者だという高校生は……」

「私達よ。正確には、吉田さんが第一発見者」

声に聞き覚えがあつた。

「あ、哀ちゃん、歩美ちゃん。って事はつまり」

「僕達もいますよ。高木刑事」

「……………コナン君」

\*\*\*

「……………そうか、君達が第一発見者だとは。驚いたよ」

本庁の刑事と面識があるらしいコナン達に交野巡査は驚きを隠せない。

「高木警部、お知り合いなんですか」

「ええ。この子達とは、もう十年来の付き合いなんですよ。昔から何故か事件現場で会う事が多くて、今ではこの江戸川コナン君に、よく事件解決の手助けをしてもらっている始末でして」

交野はまた驚いた。警視庁の一課の警部が高校生の素人探偵に絶大なる信頼を寄せている事が、信じられなかったのだ。何か夢でも見ている気分だった。

「ところで、コナン君達は何でこの島に？」

「まあ、簡単に言えば財宝探しです」

「財宝？」

「この島には、お宝が眠っているという伝説があつて、僕達もそれを探しに来たんですよ。因みにさっき旅館に居た宿泊者の人は皆、宝探しが目的みたいです」

「へえ。よほど有名なんだね」

「……………実は高木刑事、ちょっと気になってる事があって」

「なんだい？」

「被害者の首が折られていた理由なんですけど、もしかしたら見立てもかもしれないんです」

高木はえっ？という顔になる。

「この島には、宝を守る神、宝神様の伝説唄があるの。島の人なら誰でも知ってるみたいだけど、その一番歌詞と大東さんが殺害された状況とが、酷似しているのよ」

「しかも、大東さんは殺害されてから首を折られている。犯人が、何かの理由で被害者の首を曲げたとしたら、それは見立てである可能性が高いんです」

「……………それに、宝神様の伝説唄は全部で三番まであるわ。もし江戸川君の言うとおり、犯人が伝説唄に見立てて殺人を犯してるなら、少なくとも後二回は殺人が行われる事になるのよ」

見立て殺人。そしてまだ続く可能性が高い殺人劇。

「……………もしかしたら、また君達の力を必要とするかもしれないね」

高木は情けないと思う一方、こうしてコナンが事件現場に居合わせた事に内心感謝していた。

\*\*\*

大東一也の遺体は夕方になり船で本土へと運ばれていった。警視庁からの応援組も、高木だけを残し一時東京へ戻っていった。高木だけが残った理由は当然ながら、事件捜査と共に次なる事件に備える為である。因みに宿泊先は宝眠館、大東が亡くなって空き部屋となつた部屋を使用する事になつていた。

――深夜。コナンと元太の部屋では既に寝静まつた元太の横で、コナンが一人目を開けていた。昼間に事情聴取した結果、大東と同部屋の高石が六時半に四谷和泉に起こされた時、既に大東の姿は無かつたという。因みに朝食は八時からと決まつている。高木は高石と四谷に何故そんなに早く起きたのかと聞いたら、朝食前に軽く運動がてら宝探しを行うつもりだつたらしい。その後二人は旅館に戻るまで大東の姿は見えていないという事であつた。他の宿泊者の話も似たり寄つたりのものだつた。カメラマンの摂津は七時半に起床、大学生の松原は七時に起きたらしい。当然ながら大東の姿は目撃してないし、一人部屋の為アリのバイは成立しない。高石と四谷も、全く犯行が不可能という状況でもないだろう。六時半に起きたというのが嘘だとして、それ以前に恐らく鍾乳洞に居るであろう大東を殺害する事も可能だし、仮に六時半起床が本当だとしても、早朝の宝探しに行くふりをして大東を殺害する事は出来る。結局、誰にでも犯行は行えたのだ。

(…………… だけど、大東が鍾乳洞に行く事がある程度予想出来たのは、高石さんと四谷さんぐらいだ。摂津とかいうカメラマンは、トレジ

ヤーハンターだったら調べてみたい筈だと言っただけで、大東さんの性格を理解していた訳じゃない。となると、怪しいのはあの二人………)

考えに耽っていたコナンだが、その思考は思わぬ音で中断した。探偵団バッチの呼び出し音だ。昼間哀に返すのを忘れていたらしい。コナンはバッチの応答ボタンを押した。呼び出しの相手は哀であった。

『……今から、出てこられる?』

「……えっ? ああ、いいけど。何だ?」

『……ちょっと話したい事があった。旅館の外で、待ってるから。そう言うと哀はスイッチを切った。コナンは浴衣から私服に着替え、元太が起きない様に静かにゆっくりと、障子を閉めた。』

## 7・姉のヘアピン

宝眠館の正面入り口を出ると少し道が坂になっていて、その坂を下りたところにある街灯の下に哀は立っていた。日中の暖かさから一転夜には気温が一気に下がる為明かりの下で吐く息は白く見えた。コナンは哀に呼び出された理由に薄々感じている。哀の事だ、自分自身の何時もと違う様子にコナンが不信感を抱いている事を気付いている筈。しかもコナンは今、島で起きた殺人事件の捜査に乗り出そうとしている。自分のせいで事件捜査に支障が出るかもしれない。哀はそういうのを嫌がるから、こうなった以上隠しておすのは得策じゃないと判断して全てを打ち明けてくれる筈だと、コナンは信じていた。

「……………ごめんなさい。こんな時間に」

「いや、いいよ。まだ起きてたし」

コナンはその場にしゃがみこんだ。

「……………昔ね、お姉ちゃんがこの島に来た事があるの」

哀が静かな口調で語り始める。

「まだ、本当に子供の頃よ。まだシェリーの名を与えられてない、ただの宮野志保だった時に、お姉ちゃんがお宝が眠っているっていうこの島に私を連れて来てくれたの。そこで、ほんの数時間だけ一緒に宝探しをしたわ。…………私だって、ちょっとは子供らしいところもあったのよ」

最後を少し強調して言った哀。自分が宝探しなんて意外だなと思われた事を察しての事だろう。

「……それから、私とお姉ちゃんがこの島に来る事は無かったわ。私は組織の科学者として自由を奪われたし、姉は私を組織から脱会させようと必死になって動いてた。この島の事も、すっかり忘れてたの」

しかし宮野志保から消えていった宝眠島の思い出は長い年月を経て灰原哀の記憶の中に甦ったのである。

「……吉田さんから宝眠島に宝探しに行こうって誘われた時、昔の記憶が甦ってきたの。それと同時にお姉ちゃんが宝探しの時に失くしたヘアピンの事も思い出してね」

哀はフツと小さく笑った。

「バカみたいでしょ？もう二十年以上前に失くしたヘアピンがある筈もないのに……。だけど、お姉ちゃんに関する物を全て組織が処分した今となつては、お姉ちゃんの形見はその失くしたヘアピンしかないから。だから……。」

かつての姉との思い出、唯一姉がこの世に遺した物。哀はそれを求めここに來ていた。まさかある訳ないと思っていたが、ほんの僅かな希望を哀は信じたかったのだ。

「……今まで隠しててごめんなさい。でも、あなた達には関係のない話だから。私の話はそれだけ。……じゃあ、おやすみなさい」

そう言うと哀は旅館への坂を上っていった。コナンは明かりの下でしゃがみこんだままであった。

\*\*\*

――翌日、朝食後に部屋に戻った哀は歩美が何やら出掛け支度をしているのに気づく。

「……………どこか行くの、吉田さん？」

「うん。元太君と、宝探しにね」

部屋の外から元太の声がした。歩美がそれに応じ障子を開ける。

「ちよつ、ちよつとあなた達。まだ宝探しを続けるつもりなの？所詮、あれは伝説じゃない。それに殺人事件が起きてるのよ？危険なんだから、あんまり彷徨かない方が……………」

「コナンに頼まれたんだよ」

哀の声を遮る様に元太が言った。

「……………江戸川君が？」

「ああ。事件捜査は俺と灰原がするから、俺と歩美は宝探しをしてくれてな。まあ、お宝って言っても、財宝伝説のお宝じゃなくて、ヘアピンらしいけどよ」

「えっ……………」

「それに、見つかるかどうかはわからないんだよね。何でも二十年以上前に、この島で失くした物らしいから」

「……………」

哀は言葉が出ない。すると、二人が立ち去った後も呆然と立ち尽くしていた哀の側に部屋から出てきたコナンが立つ。

「……………あいつらには、とある人の大切なヘアピンだからって言うてる」

「……………」

「見つかるかどうかはわかんねえけど、探してみる価値はあるだろ？」

下に降りよつとするコナン。そのコナンの後ろ姿に

「……………ありがとう。工藤くん」

コナンは振り返り笑顔で言葉を返した。

「……………見つけたら今度、夕飯にステーキ食わしてよ」

「……………あの子達にもね」

哀の顔に笑みが浮かんだ。

## 8・第二の死者(前書き)

感想お待ちしています

## 8・第二の死者

本土の警視庁から大東一也の司法解剖の結果を報せる連絡が高木に入ったのは午前十時頃の事である。解剖の結果、大東の死因は頭蓋骨骨折によるもので死亡推定時刻は午前六時から七時の一時間であると判断された。ほぼ高木が思っていたとおりだ。高木はコナン達にも知らせようとしたが、すぐに仲居の守口七からコナン達の不在を告げられ不意にあの鍾乳洞を頭に思い浮かべていた。

\*\*\*

コナンと哀は高木の思い浮かべていた通り再び鍾乳洞を訪れていた。事件捜査を始めるにあたって事件の発端となった場所を自分の目で詳しく見たいというのは少し刑事にも通じるところがあるかもしれない。

鍾乳洞の入り口には昨日とは明らかに違う立ち入り禁止の看板が立てられていた。壊されない様に頑丈な作りにしてある。恐らくはあの駐在の交野巡査が作ったものだろう。コナンと哀は入り口前に張られたロープをくぐり中へと入っていった。

「……………ここだな」

コナンが懐中電灯で照らした先には生々しく血痕が付着している。大東を発見した時には遺体がそれらを隠すようになっていたらしく、二人も初めて気がついた。

「殺害現場は間違いなく此処だな。大東さんがここに来た理由は、多分あの格好から考えても財宝の隠し場所としてこの鍾乳洞が怪しいと睨んだからだろうけど、犯人はどうやってここまで来たんだろうな」

「……旅館を出た大東さんの後をつけたか、大東さんをここで待ち伏せしていたか。色々方法はあるわよ？」

「待ち伏せっていう方法は、大東さんが昨日の朝早く、一人で此処に来る事がある程度予想出来た人しか実行出来ないだろうな。もしかしたらチーム全員で来るかもしれないし、下手したらその日の内には来ないかもしれない、大東さんの抜け駆けする性格をよく理解してる人なら、待ち伏せするっていうやり方はないだ。後をつけるにしろ、やっぱり大東さんがすぐにそこに探しに行くことをわかってなきゃいけないし、そういう意味じゃ高石勇三と四谷和泉の二人は容疑者として、考えられる」

しかし現時点で全員のアリバイが不確かなままである。今の段階では容疑者を特定する事は出来ない。

二人は鍾乳洞を出て宝眠館へと戻っていった。

\*\*\*

夕飯後、風呂に入る為四人で風呂場に向かったコナン達は旅館入り

口付近が何やら騒がしい事に気がついた。女将のフミと仲居の女性が数人、守口七の姿も見える。更に宿泊者の高石や松原等の姿もあった。

「どっしたんです？」

コナンの問いに七が答える。

「実は、四谷さんがまだ戻られてなくて」

現時刻は午後六時過ぎ。まだ夕食の時間までは一時間程ある時間帯にも関わらずこの騒ぎは一体何なのだろうか。

「電話があつたんだとよ。夕方四時過ぎ、その兄ちゃんの携帯にあの姉ちゃんから。何回もな」

「それで？その電話には出たの？」

「……いや、俺探索中は電話の電源切る事にしてるから」

高石の話によると今日は朝から島内の探索に望み、高石は島の北側、四谷は島の南側を探索する事になっていたらしい。探索は午後五時を終了を目処にこの旅館に戻ってくる手筈だったらしいのだが、一時間待っても四谷が帰って来ないので高石が女将に知らせたのだという。大東の事件のこともあるから、高木が探しに行っているらしいのだが発見には至ってないようだ。

「……四谷さんって、よく待ち合わせに遅れたりするんですか？」

「いや。むしろ俺達の中じゃ、一番時間に厳しい奴だったよ。五分

遅刻しただけで、大目玉さ」

確かに、其処まで時間に厳しい人間が一時も約束の時間を過ぎ、相手を待たせるといふのは少し妙ではある。そうこうしている内に高木が旅館に戻って来た。

「駄目ですね。見当たりません、彼女」

息を切らせながら言う高木。哀はコナンの耳元で呟いた。

「……………ねえ、彼女が高石さんにかけて電話、もしかして助けを求める為に」

「……………可能性はあるな。そうだとしたら、彼女はもう」

その時、コナンはふと気がつく。

「高木刑事、港の方は調べましたか!？」

コナンの様子に皆の視線が注がれる。

「……………え、ああ。港は調べたよ」

「それじゃあ浜辺は!？」

「……………浜辺? あっ、そう言えば暗くて浜辺が見えなかったから見落としてたな」

コナンは途端に駆け出す。

「あつ、コ、コナン君!!」

コナンの後を哀、そして高木、更に他の者達も追った。

——旅館から浜辺までは走って五分程、昏間は船が発着する港から浜辺は一望出来るが夜になると浜辺の姿は完全に闇へと溶ける。真つ暗闇の浜辺に差す数本の明かり。その時、コナンが持っていた懐中電灯が何かを照らし出した。

照らし出されたそれは、波打ち際で打ち寄せる波に体を濡らされていた。上から下までびしょ濡れで、明かりに照らされた背中から女性用下着が透き通って見えている。

「コナン君!!」

高木刑事が駆けつけてきた。その様子を見た他の者達も駆けつけて来る。

「……よ、四谷」

高石はそう呟いた途端、何かに狂った様に走り去ってしまった。

寒い海風が肌を刺す。そんな中で四谷和泉は痛いぐらいに冷たい海水に身を委ねていた。



## 9・宝眠館旧館

「四谷和泉さんの死因は恐らく溺死、死亡推定時刻は今日夕方の四時頃だと思われませう」

宝眠館の宴会場には高石勇三を除く宿泊者達が集められていた。高石は四谷の遺体を見た途端気が狂ったかの様に叫び、部屋に閉じこもってしまったらしい。高木による事情聴取がすぐさま行われ、彼女の死亡推定時刻のアリバイを調べたが明確なアリバイは誰もなかった。しかし大東と四谷を殺害した犯人は間違いなく同一人物である。そして、その犯人が今聴取を受けているメンバーの中に居る可能性が高いとコナンは考えていた。

「しかしお前、よくわかったな。浜辺が怪しいって」

カメラマンの摂津が言う。

「四谷さんを殺害した犯人が大東さんを殺害した犯人と同じだと考えるなら、犯人は宝神伝説になぞらえて犯行を行う筈。大東さんは宝神伝説の一番の歌詞になぞらえて殺害されています。なので、もし四谷さんが殺害されるなら、宝神伝説の二番、水辺で溺れて殺されたの歌詞どおりに殺害される筈だから、浜辺に居るかもしれないって思っただんです」

「……………しかし、犯人は何であるの二人を」

「……………二人が殺された動機はわかりませんが、犯人はまだ、あと一人殺害するつもりでしょう。宝神伝説最後の歌詞になぞらえてね」

宿泊者達の間には緊張が走った。

\*\*\*

……夕飯後、コナン達の部屋に集まった四人。コナンと哀は事件の事について話していた。

「……大東さんに四谷さん、同じトレジャーハンターチームの二人が殺された。となれば、犯人が次に狙うのは高石さんって考えられるわね」

「……まあな。問題は犯人の動機だ」

「あの三人に恨みがある。簡単に考えれば、そうなるわね」

「……トレジャーハンターか。ちょっと調べてもらうか」

するとコナンは携帯電話のボタンを押し、押し終わると電話を耳に当てた。

「あつ、もしもし。裕美さん？俺です、コナンです」

歩美が哀の耳元で「誰？」と聞いた。コナンの知り合いで、そんな事を頼むのに適している人物といえは哀は思い当たる節がある。

『久しぶりねえ、コナン君』

かつて鬼の仮面の事件の際、自分達を取材しようとツアーに潜り込み共に事件に遭遇した雑誌記者、松浦裕美であった。

「すみません裕美さん、いきなり電話して」

『ううん、コナン君からの電話ならいつだってOKよ、どうしたの?』

「実は、ちょっと調べてほしい事があって」

「調べてほしい事?」

「はい。大東一也、四谷和泉、高石勇三、この三人のトレジャーハンターチームの過去を調べてほしいんです」

「……トレジャーハンターチームの過去ね、わかったわ。君が言う事だから、きっと何か殺人事件に関する事なんですよ?」

「……まあ。一応」

「任せといて。明日には返事するわ」

「お願いします」

コナンは電話を切ると哀を見て静かに頷いた。

\*\*\*

「……夜。九時過ぎコナン達は下で何やら高石と女将達が揉めているのに気がつく。」

「いけません。あんなところにお客様をお泊めする訳には」

「こんなところに居る方がよっぽど危険だよ!!」

高石は荷物を持っており旅館を出ようとしている。既に船は最終便の運航を終えてしまっている。

「どうしたんですか、七さん」

「あつ、コナン君。実は高石さんが、旧館に行くって仰有って」

「旧館？」

「ええ。去年まで使ってた建物なんだけど、大分老朽化が進んでてね。それでこの新館を新しく建てたの……」

「どうやら高石自身も次に狙われるのが自分かもしれないと思っているらしい。こうなってしまうえば人間不信状態である。誰も信用する事など出来ないであろう。」

「とにかく俺は、殺されるのは御免だ!!今夜一晩旧館に泊まって、明日朝一の船で東京に帰る!!」

旧館の鍵は既に高石が持っている。女将達の制止を振り切り高石は一人旧館へと向かってしまった。

「……………はあ。大変な事になってきたわね」

女将がうなだれる様に奥へと消えた。

「七さん、旧館ってどこにあるんですか？」

コナンが聞くと七は旅館の入り口窓から、闇の先にひっそりと立つ建物を指差した。

「あれが旧館よ。ここからだど、歩いて五分ぐらいね」

コナンと哀は闇夜に不気味に立つ旧館を眺めていた。

## 10・ダイニング・メッセージ

――深夜一時過ぎ。コナンは尿意を感じ目を覚ました。せつかく布団で温まった体をまた冷やすのは嫌気が差したが我慢出来そうにもなかった為、渋々コナンは布団から身を離れた。

トイレは一階、宴会場の前を通った先にあり、その途上一度玄関口を通る事になる。まだ寝ぼけ眼のコナンがそこを通った時、コナンは少し先に赤く染まる空を見つけた。だんだんと意識が覚醒し、コナンは叫んだ。

「火事だ!!」

\*\*\*

「………何でこんな事に」

目の前には炎に身を包んだ旧館の姿がある。島の消防団が必死に消火活動を行い漸く鎮火したのは午前三時過ぎの事であった。焼け跡から一人の焼死体が発見されたのは、それから更に一時間程してからの事である。

「………あの時、無理にでも止めておけば、こんな事には」

フミがうなだれるのを七が慰めている。宝神伝説最後の歌詞「炎に焼かれて殺された」犯人はとうとう、目的を果たしてしまったのだ。

こうなればコナン達がする事はただ一つである。必ず真犯人を見つけて出し、事件の全容を明らかに。

\*\*\*

朝食後、コナンと哀は旧館焼け跡を訪れていた。まだ辺りは少し焦げ臭く、火事の凄さを物語っている様だ。二人は高石の焼死体が発見された三階の一番奥の部屋が面している旧館裏手に回ってみた。旧館裏手は草木が生い茂る場所で、一部の草木は炎に焼かれていた。陽の当たりも少ない。

「……部屋から飛び降りようとはしなかったのかしら」

「……出来なかったのかもしれないねえな。例えば犯人に気絶させられてたとか」

「だけど、あれだけ神経質になってた高石さんが、誰かを部屋に入れたりするかしら」

「……まあ、そこだよな」

考えに耽りだしたコナンの隣で哀が何かを見つめる。

「……時計」

デジタル式の時計で動きは止まっているが、時間は読み取れる。この時計だけは火事の被害を受けていない様だ。

「……その時計、高石さんが持ってたやつだな」

コナンが言う。

「何でこれだけこんなところに……」

「……高石さんが、投げ捨てた？」

「……今から死ぬかもしれない人間が、そんな事をする理由は一つしかねえな」

コナンと哀は口を揃える。

「ダイイング・メッセージ」

\*\*\*

コナンの元に雑誌記者の松浦裕美から連絡があったのは午前十時を少し廻った頃である。松浦は電話口で面白い事がわかったと意気揚々に話し始めた。

『実は、五年前まで大東一也達のグループにはもう一人メンバーが居たらしいの。名前は九十九公平さん。五年前に探索中の事故で亡くなってるわ』

「亡くなってる？」

『ええ。足を踏み外して、崖から落ちたらしいの。そしてそれ以来、あの三人に九十九さんの話をする、異常なまでに拒否反応を示すようになったんだって』

大東達は九十九公平の死に関して、あまり触れたくないという事だったのか。

『あつ、それから九十九公平には結婚を間近に控えた恋人も居たそうよ。えっと、確か名前は』

松浦裕美からその名前を聞いた途端、コナンは高石が遺したダイイング・メッセージの意味もわかった。

「……………あの人か」

哀はコナンの表情にうつすらと悲しみの色が浮かんでいるのに気付いていた。

## エピソード（前書き）

完結いたしました。感想お待ちしています。よいお年を！

## エピソード

宝眠館を出て坂を下りたところにある街灯の下にコナンと哀の二人は佇んでいる。時刻は夜九時。哀は何度も時間を確認し、その人物の到着を待っていた。

「……………お待たせ。コナン君」

暗闇からした声の方向に目をやるコナンと哀。声の主は街灯の光に照らされる下に身を投じその姿を明らかにした。

「……………すみません。急に呼び出したりして」

「ううん。大丈夫」

そう言って微笑みを見せるのは宝眠館の仲居、守口七であった。

\*\*\*

「実は、七さんにちょっと話があるんです。僕達、明日東京へ帰りますから、今日しかチャンスがなくて」

「……………そっか、コナン君達明日帰っちゃうんだ。何か寂しいな」

彼女の笑みを見るとコナンはなかなか話を切り出せない。それを察

した哀がコナンの代わりに話を始めた。

「……守口さん。あなた九十九公平さんっていう人を知ってるわよね？五年前に亡くなった、あなたの恋人よ」

七の表情から笑みが消える。

「九十九公平さんは、今回殺害されたあの三人と同じトレジャーハンターチームに五年前まで在籍していた。不運にも、彼は五年前に探索中の事故で亡くなってるけど。彼の死こそが、あなたの今回の犯行の動機じゃないかしら」

哀がそこまで言うとコナンが意を決した様に話し始める。

「知り合いの記者さんに、色々調べてもらいました。そこでわかったんですが、大東さん達三人は九十九公平さんの事に対して異常なまでに拒否反応をおこしていたそうなんです。彼の話は三人の間では禁句となるほどだったそうです。どうしてそこまでして、九十九さんの話を拒否するのか。そう考えた時一つの仮説が浮かびました。それは、九十九さんが本当は事故死ではないというものです。何らかのトラブルがあの日あり、九十九さんと大東さん達は対立、その結果大東さん達は九十九さんを死なせてしまったのではないかと。もしそうなら、嫌な思い出はすぐに消したいのが人間の心理というもの、彼等が九十九さんの話をするのを嫌がった理由もわかります」

「九十九さんの恋人だったあなたは、その事を知り、復讐の為にあの三人を殺害した……。違うかしら」

しばしの沈黙。港の方から波の音が聞こえる。どれくらい誰も口を開かなかっただろうか、コナンは随分長い間沈黙のままだった様な

気がしていた。

「……………何時から？」

聞きそびれそうな程小さな声で七が言った。

「……………何時から、私が怪しいって思ってたの？」

するとコナンはポケットから高石の時計を取り出した。

「七さんが犯人かもしれないと思い始めたのは、この時計の示す意味に気がついた時です」

「……………それ、高石さんが付けてた」

「はい。高石さんはこの時計に犯人の名をしつかりと遺してくれています」

コナンは時計を七に見せる。デジタル式時計は午前七時を示して止まっていた。

「……………成る程ね。七時で止まった時計から、数字の七を名前に持つ私が怪しいって思ったって訳か。あいつがこんな物遺してたなんて、気がつかなかったわ」

七は大きく溜め息をついた。彼女の中で、今全てが終わったという感じがしたのだろう。

「コナン君、あなたの言う通りよ。私があの人を殺したの。公平さんの復讐の為にね」

「……………」

「あの三人は、あなた達が島に来る前日に島に来ただけど、その日の夜たまたま聞いてしまったのよ。三人と公平さんが他愛ない事でトラブルになり、腹を立てた三人が腹いせに公平さんに間違った道を教えて、そのまま公平さんが亡くなったって事を。公平さんの死を事故だとばかり思ってた私は、その時悪魔に魂を売ったわ。あの三人に復讐してやるって。そして次の日の夜、大東さんに鍾乳洞の事を話したの。三人の話は公平さんからよく聞かされてたから、性格もある程度はわかってた。大東が次の日の朝、鍾乳洞に一人で来る事も予想してたわ。そしてあとは順送りに、四谷、高石の二人を殺し、私の復讐計画は終わったの」

「……………宝神伝説になぞらえて犯行を行ったのは、なぜなんです？」

「……………宝探しが好きなあの三人には、こういう死に方が似合うと思ってるね」

こうして宝眠島での惨劇は静かに幕を下ろした。

\*\*\*

――翌日。朝、高木と本土から来た警視庁の応援と共に守口七は連行されていった。次の連絡船が来るまで少し時間がある為、コナ

ン達は港で待っていたのだがふと哀が歩美と元太が不在である事に気がつく。

「……どこ行ってるのかしら、あの二人」

暫くして荷物を持った二人が戻って来た。すると歩美が哀に近寄り、自身の掌にある物を見せた。

「哀ちゃん、これ。見つけたよ！」

それは子供用のヘアピン。哀は驚きを隠せない。

「二十年前に島で拾った人が、ずっと大切に持ってたんだよ。苦労したせいで、見つけるの」

哀はヘアピンを手取る。途端に姉との思い出が頭の中に蘇ってきた。

「……………哀ちゃん？」

「……………灰原？」

心配そうに哀を見つめる二人。哀はそっぽ向いてしまっている。

「あんまり、嬉しくなかったのかな」

「もしかして、違うやつだとか……………」

二人の声が聞こえたのか哀はくるっと向き直り

「ありがとう、二人共。見つけてくれて」  
と言った。

「……そして連絡船の上。隣同士に座るコナンと哀。」

「……良かったな。見つかって」

「……ええ」

「あいつらに感謝しろよ？」

「……充分感謝してるわ。あの子達にも、あなたにも」

そして哀はコナンを見て軽く笑みを浮かべながら言う。

「本当にありがとう、工藤君。貸し作らしたわね」

「……バーロ」

コナンが立つ。

「……礼を言うのは俺だよ。何時もお前には助けられてるからな。  
これからも宜しくな、灰原」

そう言って手を差し出すコナン。

「……ええ。こちらこそ」

哀はその手をしっかりと握った。

〜完〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4331p/>

---

宝神伝説殺人事件

2011年3月5日00時40分発行